

金剛院経塚

平成26年度



2015年3月

まんのう町教育委員会



金剛寺と金華山(金剛院経塚) 南より



経塚出土遺物

[表紙]金剛院地区(中央が金剛寺) 遠景 南より

序 文

金剛院経塚が立地する炭所東地区は、古くから仏教に因んだ仏縁地名が多いところとして知られており、ある意味で仏教が人々の生活に溶け込んでいた地域と言えます。現在は真宗興正派の寺院となっている石仏山金剛寺の所在する地も、平安時代の末頃に、弘法大師が高野山開基以前に全国に大寺院を建立しようと試みた名残と推定されており、金剛院の地名もこの地にあった古刹に由来するとされていることとも併せ、この地域の歴史の古さと奥深さを感じます。

さて、まんのう町教育委員会では、地元にある文化財の保存と活用を目的に各種の調査を行ってきております。今回上梓しました報告書は、平成 26 年度に実施しました各種調査のうち、金剛院経塚に係るものです。金剛院経塚のこれまでの調査につきましては、昭和 37 年に実施した発掘調査で陶製の経筒外容器などが出土し、町の資料館で保管展示しております。これまでの調査を補完すべく、平成 23 年度から本格的な調査を開始しております。平成 23 年度には、第 2 テラスの発掘調査を実施し、遺構 3 基、土坑 1 基、溝状遺構 1 条を検出しております。平成 24 年度には、「まんのう町仏教関係遺跡群調査」の一環として発掘調査を実施し、山頂において経塚の分布が見られることを確認しております。こうした成果を踏まえ、今年度は第 1 テラスにおいて測量調査と分布調査を実施しました。今年度の調査からも、多くの成果と課題が出ており、今後の調査を企画実施するために大いに活用しなければならないと考えております。

このたび、多くの方々の御高配と御尽力により、『まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第 13 集 金剛院経塚 平成 26 年度』を発刊する運びとなりました。本報告書が研究資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と关心が一層深められることになれば幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査に格別の御指導と御協力を頂きました関係の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、今後とも宜しく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

まんのう町教育委員会

教育長 斎 藤 賢 一

例 言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁の文化財補助金を受けて平成 26 年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町炭所東 1686-1 他に所在する金剛院経塚発掘調査の報告を収録した。
2. 発掘調査及び報告書の作成は、まんのう町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
片桐孝浩、上里八重子、鈴木信男、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、
金剛寺檀家の皆様、まんのう町文化財保護協会
4. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標第IV系の北であり、標高は T.P. を基準としている。
5. 挿図の一部に、国土地理院長の承認及び助言を得て同院所管の測量標及び測量成果を使用して得た平成 20 年 3 月測図まんのう町 1:2500 地形図を縮小編集したまんのう町全図 (1:10000、承認番号 平 19 四公 第 4 号) を使用した。

目 次

1. 周知と活用	1
2. 立地と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3. 調査の経緯と経過	2
(1) 調査に至る経緯	2
(2) 調査の経過	3
4. 調査の成果	6
(1) 遺構	6
(2) 遺物	11
(3) まとめ	12

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 平坦地分布図	5
第3図 金剛院経塚全体図	7
第4図 第1テラス 経塚検出状況平面図	9
第5図 出土遺物実測図 報文番号1~8	11
第6図 出土遺物実測図 報文番号9	12
第7図 出土遺物実測図 報文番号10~22	13

表 目 次

土器観察表	14
-------	----

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 金剛寺と金華山(金剛院経塚) 南より

経塚出土遺物

図 版 1 金剛寺正面と十三重塔 南より

金華山全景 北より

図 版 2 第1テラス南半北部 西より

第1テラス南半中央部 南より

図 版 3 第1テラス南半南部 南より

第1テラス S14付近 遺物分布状況 南より

図 版 4 出土遺物 報文番号 1~8

図 版 5 出土遺物 報文番号 9~12・14

図 版 6 出土遺物 報文番号 13・15~18

図 版 7 出土遺物 報文番号 19・20

図 版 8 出土遺物 報文番号 21・22

1. 周知と活用

本町社会教育課文化財室では、町内文化財の周知と活用を図るため、外部団体からの見学・講演依頼による講師派遣、子ども向け企画の出前授業、琴南ふるさと資料館と旧仲南北小学校民具展示室の常設展示、町内公共機関でのパンフレットの配布、まんのう町文化祭と琴南地区文化祭での文化財関連の展示、他団体の発行物への寄稿等を行っている。

本年度の傾向としては、昨年度末に整備工事が終了した中寺廃寺跡の現地見学が、天候の不順も続々と現れ、現地見学は見合せられ、現地に設置しているパンフレットの減枚数より推定すると、個人の登山者は1カ月に20~30人来訪しており、着実に増加している。町内では、これまでの周知活動で中寺廃寺跡の存在は知っていたが、山道に不安があるため現地見学は見合せられていたという方々から、整備ができたなら行ってみたいといった声が多く聞かれ、徐々に遺跡の活用へと効果が表れ始めたのではないかと考えられる。今後も整備により安全に登山できるようになったこと等を周知して、住民に益々活用され、親しまれる遺跡を目指したい。

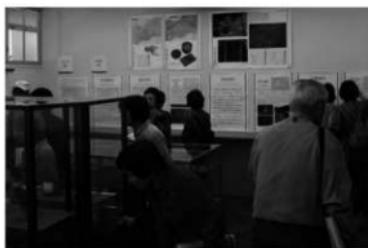
活動実績

実施日	内容	参加者数
2014/5/21	琴南公民館通学合宿 火起こし体験	12
2014/6/6	香川県文化財保護協会仲多度支部研修会 まんのう町かわん会館 满濃池資料展示説明	30
2014/6/7	一般団体 琴南ふるさと資料館 中寺廃寺跡展示説明	30
2014/8/11	まんのう町四条公民館 夏休み教室「土笛づくり」	18
2014/8/21	満濃大学講演「まんのう町の文化財」	134
2014/8/23	四国塗場開創1200年記念四国へんろ展高知編 中寺廃寺跡遺物高知県立美術館展示	-
2014/9/27	香川県埋蔵文化財センター「讃岐国府を探る5」琴南ふるさと資料館展示	65
2014/10/10	まんのう町吉野公民館「みよしの探訪」琴南ふるさと資料館見学	30
2014/10/22	香川県文化財保護協会調査研究会 町内の県保存木見学	31
2014/10/25	満濃南小学校青少年育成会議「ふるさとウォーキー」町内遺跡見学	55
2014/11/1	琴南地区文化祭 琴南ふるさと資料館開放	48
2014/11/23	伝統芸能の町まんのう2014フォトコンテスト	22
2014/11/23	まんのう町文化祭文化財展	316

活動の様子



H26.5.21 琴南公民館通学合宿 火起こし体験



H26.10.10 みよしの探訪 琴南ふるさと資料館見学

2. 立地と環境

(1) 地理的環境

まんのう町は、平成18年3月20日に香川県仲多度郡南部の3町(琴南町・満濃町・仲南町)が合併して誕生した町である。香川県中部(中讃)に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・普通寺市・琴平町、南は徳島県美馬市・三好市・東みよし町に接している。町の面積は194.45km²、人口は約2万人である。町の南部及び南西部には、標高1,000mを超える竜王山(1059.9m)、大川山(1042.9m)を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一級河川土器川が北流している。

金剛院経塚は、土器川右岸の高丸山・猫山・小高見峰などに囲まれた狭隘な谷部を開けた金剛院地区に所在する。金剛院地区は山間部にありながら、阿弥陀越や法師越といった峠道により交通の便は良く、古来より峠を介しての往来が盛んな地域であった。金剛院地区的谷部のほぼ中央に金華山と呼ばれる標高約207mの小山があり、その南側斜面に石仏山金剛寺が、山頂部に経塚群が所在する。

(2) 歴史的環境

まんのう町内には各時代・各種類の文化財が散在しているが、中でも古代から中世にかけての重要な仏教関係遺跡が所在することが特徴である。それは白鳳・奈良期の古代寺院である弘安寺廃寺・佐岡寺跡、平安時代の山林寺院である国指定史跡中寺廃寺跡、平安時代後期から中世の山林寺院である尾背廃寺跡、平安時代後期の経塚群が所在する金剛院経塚、弘法大師空海との関係が深い満濃池・神野神社・神野寺等である。これらは中寺廃寺跡と満濃池を除き詳細な調査は行われていないが、これまでの断片的な調査から見えてくるものは、白鳳・奈良期の古代寺院、平安時代の古代山林寺院、平安時代後期～中世の山林寺院、経塚群という変遷の可能性であり、またこれらが約10kmの範囲内に所在し相互に関係した可能性が高く、まんのう町に古代から中世にかけて華開いた仏教文化を物語る貴重な文化財といえる。

3. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

金剛院地区には仏縁地名が多く残り、平安時代末期から鎌倉時代に繁栄した大規模な寺院が存在したとの伝承が語り継がれてきた。現在の金剛寺は後に再興されたものである。

しかし、金剛寺の由来を記した古文書は現在まで確認されておらず、金剛寺門前に建立された十三重の石塔(鎌倉時代後期)のみが歴史を物語る資料であった。昭和時代に入ると集石群が露出した金剛寺裏山より、瓦や土器などの遺物が採集され始めた。

そこで昭和 37 年、地元有志を中心とした金剛院経塚の発掘調査が行われた。当時の記録によると陶製経筒外容器 5 点が埋納された経塚 1 基を完壊し、陶製経筒外容器 1 点が埋納された経塚 1 基を半壊したとある。調査時に出土した遺物は、調査以外で採集された遺物とともに金剛寺で保管されていた。現在、保存状態の良い鐵製経筒 1 点、陶製経筒外容器 9 点、陶製経筒外容器蓋 9 点、銅鏡 1 点がまんのう町の有形文化財に指定され、未指定の遺物も含め町へ寄託されている。

まんのう町では町内の仏教関係遺跡群を計画的に調査・整備し、地域住民の誇りとなる大切な文化財として、保護・活用を図ることを目的に「まんのう町仏教関係遺跡群調査事業」を開催している。その一環として、平成 15 年度から 25 年度までは、国指定史跡中寺廃寺跡の調査及び保存整備を実施してきた。平成 23 年度からは、まんのう町炭所東字金剛院の石仏山金剛寺裏山に位置する「金剛院経塚」の調査に着手している。

(2) 調査の経過

今回の調査は平成 26 年 6 月 13 日から平成 26 年 12 月 24 日まで、まんのう町教育委員会が行った。調査区は現状でのテラスの分布状況に基づき、頂上のテラスを第 1 テラス、2 段目を第 2 テラスと呼称する。

平成 23 年の第 2 テラスのトレンチ調査では、山側を切土し、谷側に盛土した平坦面造成の痕跡を確認した。平坦面上で柱穴、土坑、排水溝を確認したが、いずれも時期は特定できなかった。

平成 23 年 10 月から 24 年 4 月にかけて、平成 22 年に町の有形文化財に指定された金剛寺十三重塔周囲の発掘調査を行い、十三重塔が、建立された鎌倉時代後半より大きく位置を変えず、現在に至ることを確認した。また塔西沿いには参道が存在していたことも確認した。

今回の調査は第 1 テラスにおいて、腐葉土等を除去しながら平面実測を行った。採集した遺物は 280 コンテナ 6 箱である。整理作業は発掘調査と並行して行い、発掘調査終了後に報告書編集作業を行った。



第1図 遺跡位置図



第2図 平坦地分布図

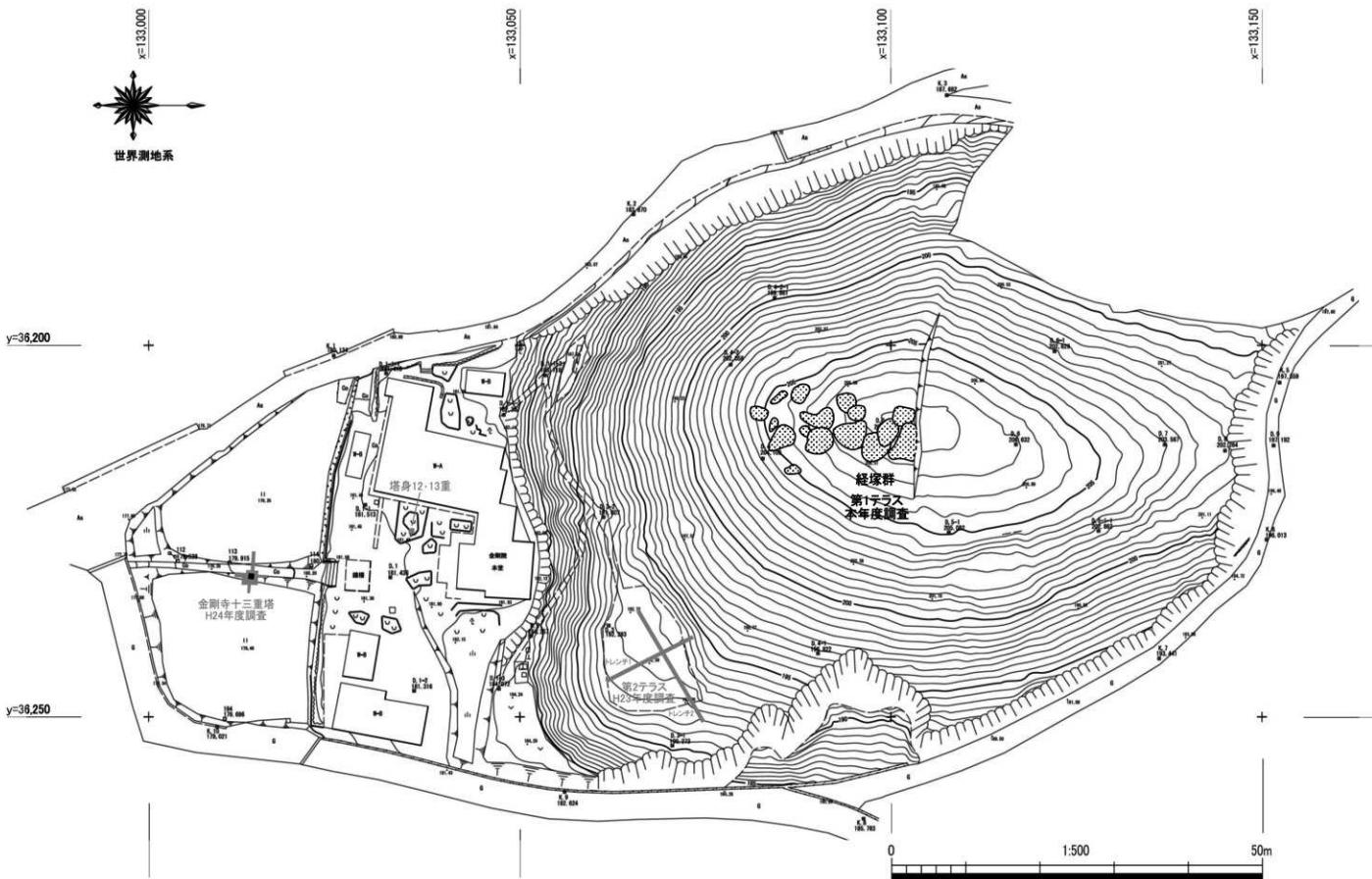
4. 調査の成果

(1) 遺構

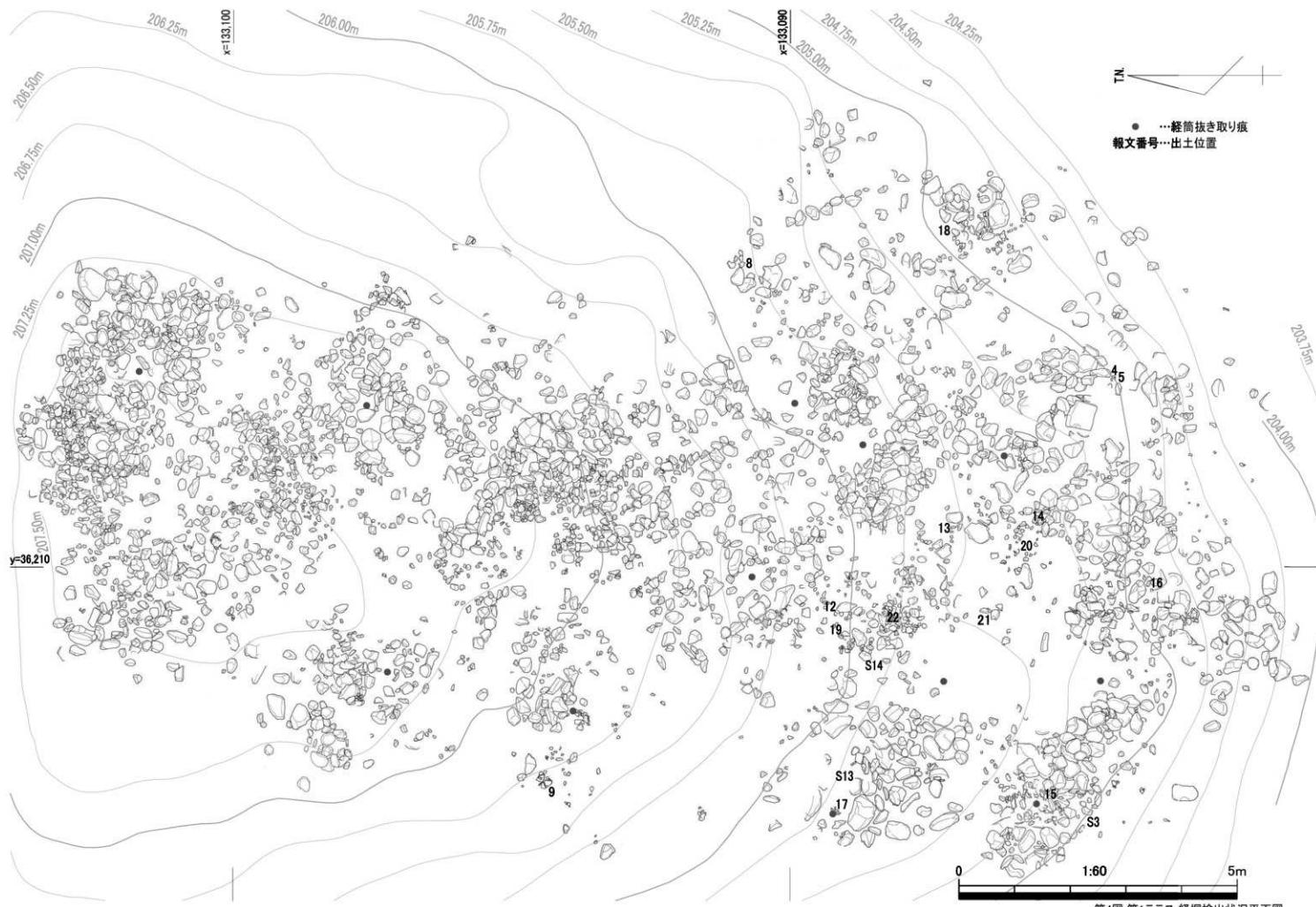
本年度の調査は第1テラスについて調査を行った。第1テラスは金剛寺裏山の金華山山頂部にあたり、標高207.6m、テラスの南北約50m、東西約26m、外周約127m、面積約1,032m²である。山頂部全体にテラスが広がるが、頂上から北半は近年の耕作地造成によって削平されており、経塚群も現地表面では確認できない。調査を実施した南半は、面積423.37m²である。金剛寺建造物の建て替え・修繕に使用するために檀家によって植林された樹齢60~80年のヒノキ33本と、自然発生した雑木52本に覆われ、それらの根が這う隙間に、経塚を構成していたとみられる直径10~60cmの石が散乱している。平成24年度の調査で地形測量を行い、標高差3.5mの間で散乱する石が概ね16群にまとまることを確認した。この16群の中には、ある1群から転落もしくは除去されて、もう1群を形成した個体も存在する。今回の調査では、散乱した石群の上面に積もった落ち葉、腐葉土を除去し、検出した状態を平面実測した。

検出状況を観察すると、いずれの塚も盛り上がりに高さがなく石が不規則に散乱し、また塚中央部の石が人為的に周辺に移動させられている地点も見られる。塚中央部は経筒を抜き取った後に窪地となることから、植栽し易かったと考えられ、現在はヒノキが大きく育ち、さらにはその根によって周囲の石が移動している。南半全体を精査し終えた現況で、未発掘の塚は見受けられないことから、昭和37年の発掘調査まですべての経塚が発掘されたと考えられる。頂上の削平ラインから南へ6m付近より谷側で、経筒の抜き取り痕と見られる直径30~50cmの窪地を12箇所確認した。これらの窪地は現地表から最深でも5cm下がる程度で、現在は土で埋まり内部は観察できない。南半全体で須恵器甕等が表探されているが、特にS14付近では陶製経筒外容器の破片が集中していることから、過去の発掘時に付近で破損し持ち帰られなかつたと考えられる。

使用されている石材は砂岩が多く、その中に安山岩が10~20%混じる石群を数基確認した。安山岩の風化度合いに顕著な差が見受けられ、北東部の石群では風化が進んだ安山岩が使用され、南西部の石群ではあまり風化していない安山岩が使用されている。造営の時期差によって強弱2種類の安山岩が使用されたと考えられる。また五輪塔の一部と見られる加工痕のある石や凝灰岩、花崗岩、結晶片岩も混入している。平安時代から鎌倉時代にかけて營まれた経塚は石室、石組をもつものが多いことから、まばらに分布する直径50~60cmの板状の石が蓋石、底石等の可能性もあり、今後の調査に注意したい。



第3図 金剛院経塚全体図



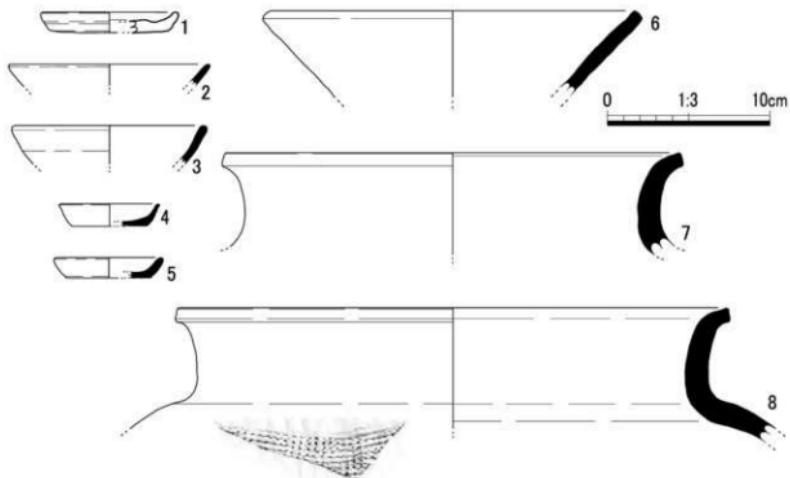
第4図 第1テラス 経塚検出状況平面図

(2) 遺物

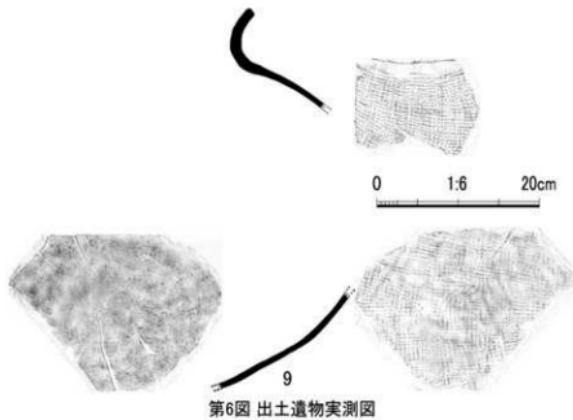
金剛院経塚では第1テラス集石群の精査中に、280コンテナに換算して約6箱分、取り上げ点数165点の遺物を表採した。出土遺物の種類は須恵器・土師器・瓦質土器等で、時期は12世紀中葉から13世紀であった。

1~22はすべて第1テラスにて表採した遺物である。

1は土師器小皿である。底部は平たくヘラ切りされている。2・3は瓦質土器碗である。2は体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ伸びる。3は体部から口縁部にかけてやや内湾し外上方へ伸びる。4・5は瓦質土器小皿である。底部は水平にヘラ切りされている。4は薄作りで口縁端部を外方へつまみ出す。5はやや厚く口縁端部は直線的に伸びる。6は瓦質土器こね鉢である。体部は直線的に外上方へ伸び、そのまま口縁端部に至る。香川県綾歌郡綾川町陶に所在する十瓶山古窯跡群において焼成されたものである。法量から推測すると経筒外容器の蓋として転用された可能性が考えられる。7~9は須恵器甕である。いずれも焼成は堅敏で内外面は灰色から灰オリーブ色を呈する。7・8は頸部が直線的に上方へ伸び、口縁部を外方に屈曲させている。8・9は外面に約3mm間隔の格子叩きを施し、内面はナデを施す。9は頸部から口縁部にかけて外湾し、そのまま口縁部に至る。体部下半の形状より丸底と考えられる。



第5図 出土遺物実測図



第6図 出土遺物実測図

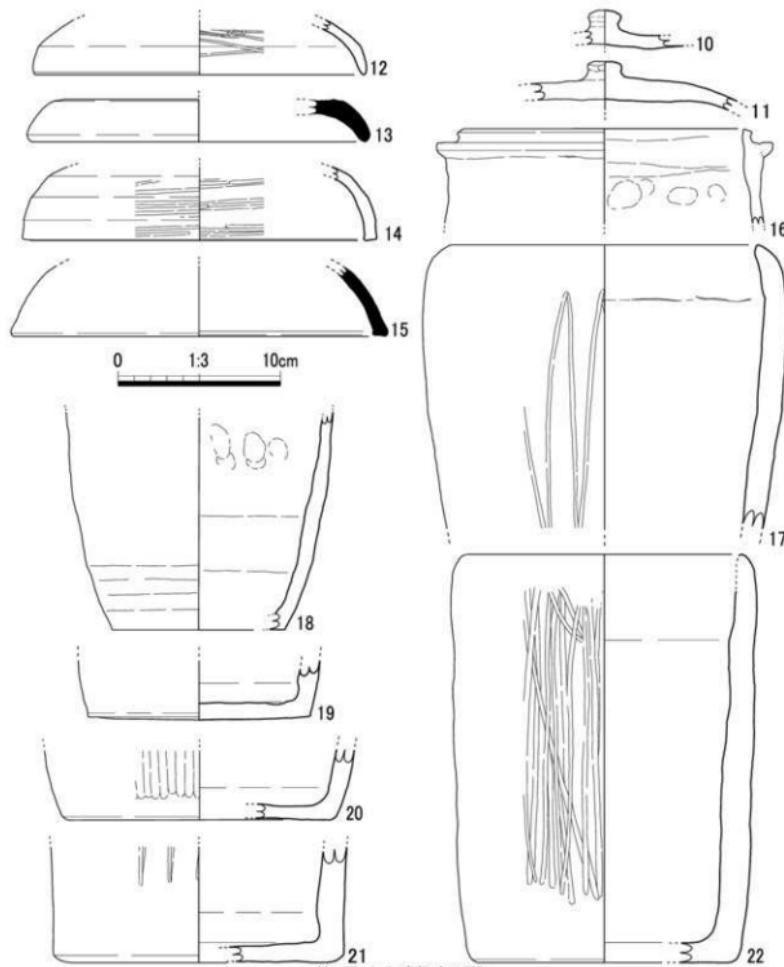
10～15は経筒外容器の蓋である。10・11・12・14は土師器、13・15は瓦質土器である。10・11はつまみの部分である。つまみはナデによってボタン型に成形されている。12～15は口縁部である。12は体部から口縁部にかけて内湾し、そのまま口

縁端部に至る。体部内面に粗いヘラ磨きを施す。外面は摩耗が激しく調整は確認できない。13は上面が平たく、口縁部は浅くやや内湾し、そのまま口縁端部に至る。14は体部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部の角を若干つまみ出している。内外面ともに粗いヘラ磨きを施す。15は体部から口縁部にかけてやや内湾し、口縁端部を内方へつまみ出す。16～22は土師器経筒外容器である。16・17は口縁部から体部である。16は体部が薄く直線的に上方へ立ち上がり、口縁部が蓋を受ける受け部を持つ。17は体部が厚く直線的に立ち上がり、上部が若干開く。口縁端部はやや内傾する。体部外面に粗いヘラ磨きを施す。18～21は体部から底部である。底部外面はいずれも未調整である。18～20は体部が薄く直線的に外上方へ立ち上がる。20は外面にヘラ磨きを施す。21は体部が厚く直線的に上方へ立ち上がる。体部外面に粗いヘラ磨きを施す。22は口縁部から底部である。体部が厚く直線的に上方へ立ち上がる。体部外面に粗いヘラ磨きを施す。

各遺物の時期については、1は13世紀前半、2は13世紀前半から中葉、3は13世紀中葉、4・5は13世紀後半、6は13世紀、7・8は12世紀後半、9は13世紀、10～22は12世紀中葉から13世紀前半と考えられる。

(3) まとめ

第1テラス南半に分布する経塚群は、今まで、落ち葉の間から覗く石群を部分的に目視で確認したのみで全体像は把握されていなかった。経塚のトレント調査を実施することを考え、今年度は検出状況の記録を行った。精査の際に、12箇所の経筒抜き取り痕を確認



第7図 出土遺物実測図

したが、S3、S13 では抜き取り痕直上で外容器上部の一部を表採したことから、内容器のみ抜き取られ、外容器が埋納されたままの状態で残っている可能性もある。埋経の経塚では鏡や仏具等の副納品が出土する例も多く、昭和 37 年の調査では銅鏡が出土している。また石室状の構造も報告されており、今後、S3、S13 以外の抜き取り痕も含めさらなる精査の上、慎重に発掘調査を進めたい。また町寄託遺物についても検討を行いたい。

土器觀察表

編文 番号	神國 番号	國號 番号	種別・器種	調査区	出土層位	法量(cm)			残存量	胎土	色調		調帶	
						山溝	底接	器高			外面	内面	外面	内面
1	5	4	土師器・小皿	第1テラス	表探	8.2	7.3	1.3	3/8	長石・砂粒 細砂並	SYR7/6根	SYR7/6根	ヘラ切口・ ナデ	ナデ
2	5	4	瓦質土器・ 碗	第1テラス	蘿蔓土層直下	12.5	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂少 黃根	10YR7/3 にぶい 黃根	7.5YR8/2 灰白	ナデ	ナデ
3	5	4	瓦質土器・ 碗	第1テラス	蘿蔓土層	11.8	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂少 黃灰	2.5Y4/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	ナデ	ナデ
4	5	4	瓦質土器・ 杯	第1テラス	蘿蔓土層直下	6.0	4.5	1.4	2/8	砂粒細砂少	2.5Y5/2 暗灰黃	7.5Y6/1灰	ヘラ切口・ 回転ナデ	回転ナデ
5	5	4	瓦質土器・ 杯	第1テラス	蘿蔓土層直下	6.4	5.4	1.3	2/8	砂粒細砂少	2.5Y7/2 灰黃	2.5Y7/1 灰白	ヘラ切口・ 回転ナデ	回転ナデ
6	5	4	瓦質土器・ 二ね鉢	第1テラス	表探	22.6	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂多	2.5Y4/1 黃灰	2.5Y4/1 黃灰	ナデ	ナデ
7	5	4	須恵器・甕	第1テラス	表探	28.1	—	—	口縁部・ 腹部1/8以 下	砂粒細砂少	N4/灰	N4/灰	回転ナデ	回転ナデ
8	5	4	須恵器・甕	第1テラス	表探	34.5	—	—	口縁部・ 腹部1/8	砂粒細砂少	SY6/2 灰オーラー	SY6/1灰	格子叩き・ ナデ	ナデ
9	6	5	須恵器・甕	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	—	—	口縁部・ 体部1/8以 下	砂粒粗砂・ 細砂並	SY4/1灰	SY4/1灰	格子叩き・ ナデ	ナデ
10	7	5	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層	—	—	—	—	長石・砂粒 細砂少	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ナデ
11	7	5	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層	—	—	—	—	砂粒粗砂少	7.5YR6/6 褐	7.5YR6/6 明褐	ヘラ削き・ ナデ	ヘラ削き・ ナデ
12	7	5	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	29.3	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒中砂少	7.5YR6/6 根	7.5YR6/6 根	ナデ	ヘラ削き・ ナデ
13	7	6	瓦質土器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	20.7	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂少	2.5Y7/3 淡黃	5Y7/2灰白	ナデ	ナデ
14	7	5	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	22.0	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂少	7.5YR6/6 根	7.5YR6/6 根	ヘラ削き・ ナデ	ヘラ削き・ ナデ
15	7	6	瓦質土器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	23.1	—	—	口縁部1/8 以下	砂粒細砂多	2.5Y4/1 黃灰	2.5Y4/2 暗灰黃	ナデ	ナデ
16	7	6	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	17.4	—	—	口縁部2/8	砂粒粗砂・ 中砂少	2.5Y7/2 灰黃	2.5Y6/4 にぶい黃	ナデ	指押え・ ナデ
17	7	6	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	19.1	—	—	口縁部・ 体部6/8	砂粒粗砂・ 中砂並	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ヘラ削き・ ナデ	ナデ
18	7	6	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	10.7	—	体部1/8	砂粒細砂並	7.5YR6/6 根	7.5YR6/6 根	ナデ	ナデ
19	7	7	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	13.9	—	底部4/8	砂粒細砂並	2.5Y6/3 にぶい黃	7.5YR7/6 根	ナデ	ナデ
20	7	7	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	16.3	—	底部2/8	砂粒細砂並	10YR7/4 にぶい 黃根	10YR7/4 にぶい 黃根	ナデ	ナデ
21	7	8	土師器・ 経掛外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	18.0	—	底部3/8	砂粒中砂並	7.5YR6/6 根	2.5Y8/4 淡黃	ヘラ削き・ ナデ	ナデ
22	7	8	土師器・ 経掛け外容器	第1テラス	蘿蔓土層直下	—	16.3	—	4/8	砂粒中砂並	SYR5/6 明赤鈍	SYR6/6根	ヘラ削き・ ナデ	ナデ

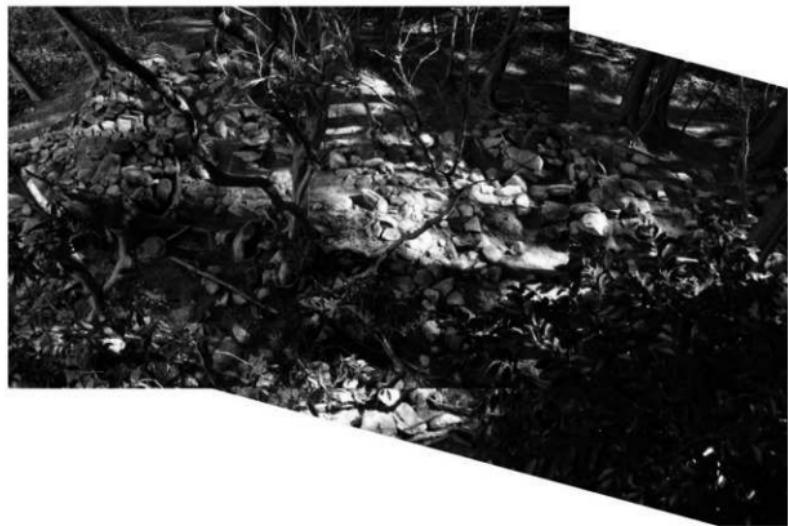


金剛寺正面と十三重塔 南より

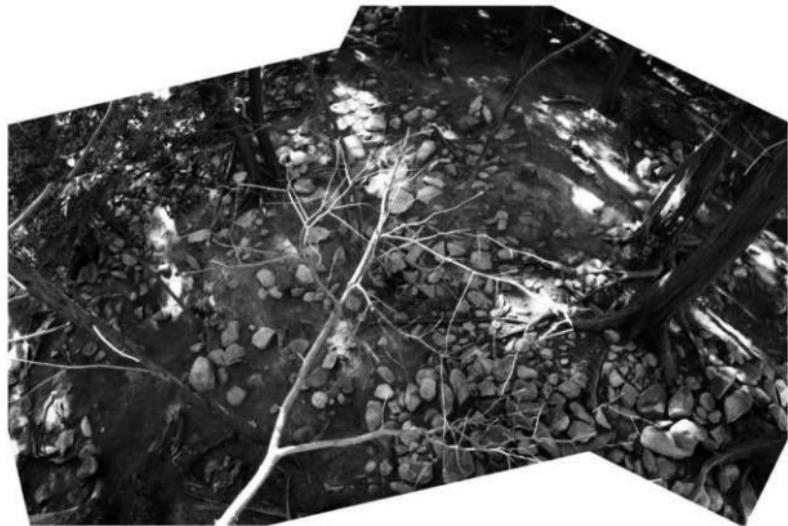


金華山 全景 北より

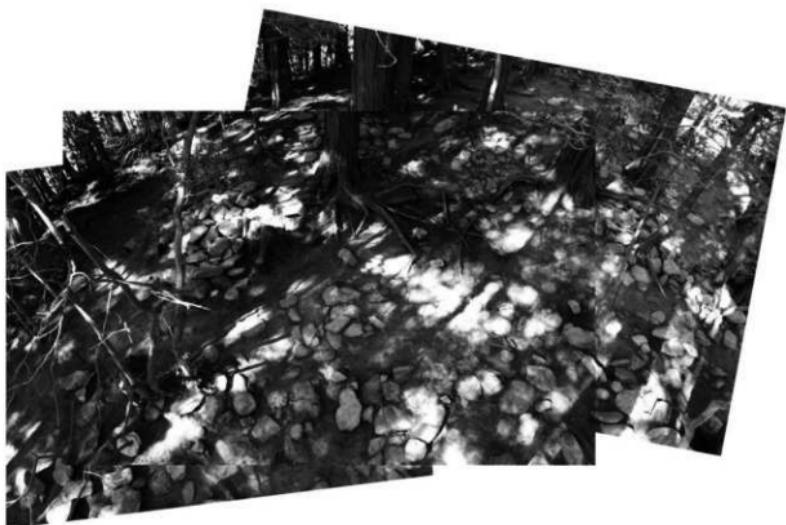
図版2



第1テラス南半北部 西より



第1テラス南半中央部 南より

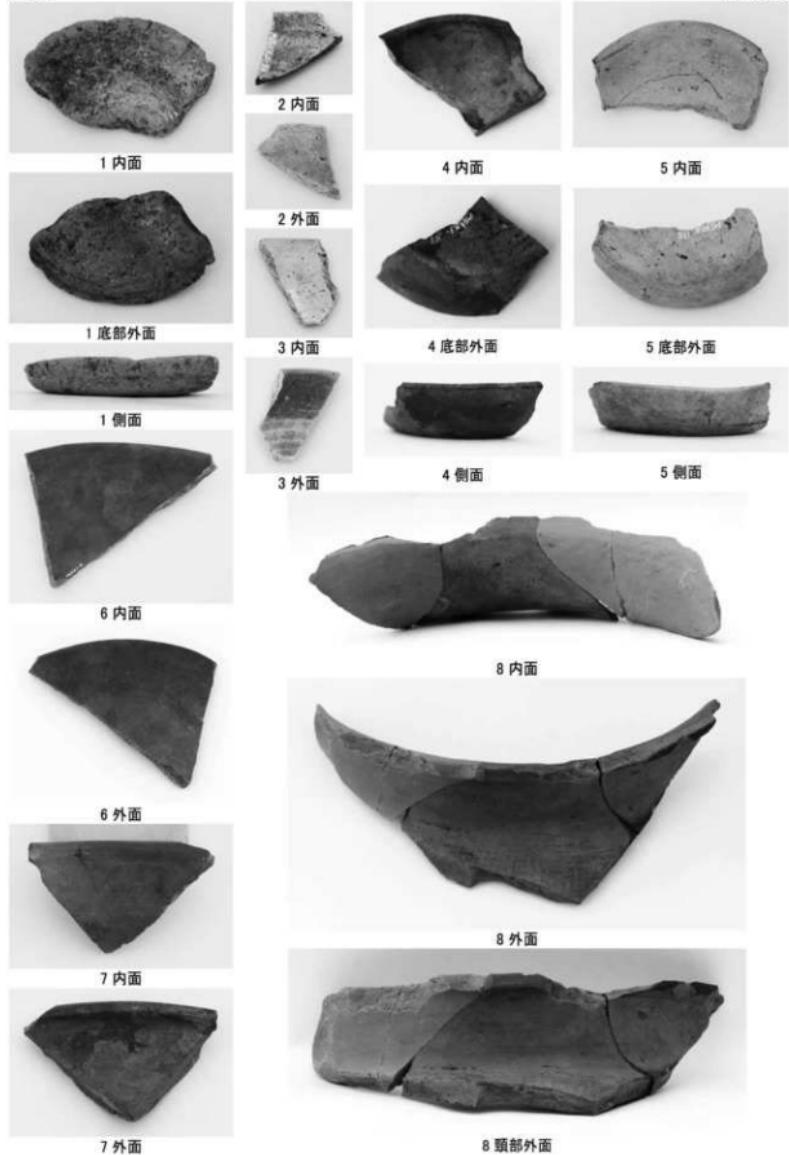


第1テラス南半南部 南より



第1テラス S14付近 遺物分布状況 南より

图版4



出土遺物

図版5



9 口縁部 内面



9 頸部・体部 内面



9 体部 内面



9 口縁部 外面



9 頸部・体部 外面



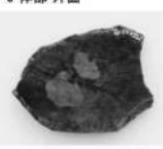
9 体部 外面



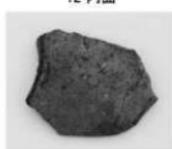
10 内面



11 内面



12 内面



12 外面



10 外面



11 外面



14 内面



10 側面



11 側面

14 外面

圖版6



13 内面



13 外面



15 内面



15 外面



16 内面



16 外面

出土遺物



17 外面



17 内面



18 内面



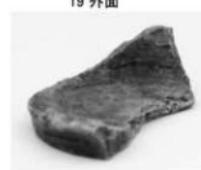
18 外面



19 外面



19 底部内面



19 内面



19 底部外面



20 外面



20 内面



20 底部外面



21 外面



21 底部外面



21 内面



22 底部外面



22 内面



22 外面

報 告 書 抄 錄

ふりがな	こんごういんきょうづか へいせい 26ねんど				
書名	金剛院経塚 平成 26 年度				
副書名					
卷次	2015年3月				
シリーズ名	まんのう町内遺跡発掘調査報告書				
シリーズ番号	第 13 集				
編著者名	中村 文枝・加納 裕之				
編集機関	まんのう町教育委員会 社会教育課 文化財室				
所在地	〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通 875 番地 琴南公民館内 TEL(0877)85-2221 FAX(0877)85-2826				
発行機関	まんのう町教育委員会				
発行年月日	2015年3月31日				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經
		市町村	遺跡番号		
金剛院経塚	まんのう町灰所東	374067		34 度 11 分 58 秒	133 度 53 分 35 秒
調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代	
平 26. 6. 13～平 26. 12. 24	423.37 m ²	学術目的調査	経塚	鎌倉	
主な遺構	主な遺物				
経塚	土師器小皿・瓦質土器椀・瓦質土器小皿・瓦質土器こね鉢・須恵器甕・ 土師器経筒外容器蓋・瓦質土器経筒外容器蓋・土師器経筒外容器				
概要					
金剛寺本堂裏、寺院敷地より北にあたる標高 207.6m の小高い山の頂上に存在する経塚群より、昭和 37 年の発掘調査で 12 世紀前半～13 世紀前半の経筒等が出土したことから、約 100 年の間に連綿と経塚が造られていたことが確認されている。経塚より出土した遺物は十三重塔と共に、まんのう町の有形文化財に指定されている。本年度の調査は、経塚群が分布する金華山の頂上、第 1 テラスにおいて実施した。テラス南半の経塚が残存する範囲を精査し、検出状況の実測および遺物の取り上げを行った。					

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第13集

金剛院経塚

平成26年度

平成27年3月31日 発行

編集・発行 まんのう町教育委員会 社会教育課 文化財室

〒766-0202

香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 琴南公民館内

電話 (0877)85-2221

印 刷 株式会社 弘栄社